

# 福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kato, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00001084">https://doi.org/10.24517/00001084</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 福井県若狭地方における 「肩車」の俚言分布

加藤 和夫

## 1. はじめに

近年公刊された、辛川十歩・柴田武著『メダカの方言—5000の変種とその分布—』(昭55. 2 未央社)によれば、メダカの俚言は全国で約5000にも及ぶとされている。

そのメダカには遠く及ばないものの、小論で取り上げる肩車の俚言も、やはり多種多様な俚言形が全国に分布し、その概観は『日本言語 地図 (Linguistic Atlas of Japan)』(以後 LAJ と略記する) 149・150図によって初めて可能となった。

ところで、福井県内の肩車の俚言分布に関しては、これまでも藤本良致氏の報告および福井大学教育学部国語学研究室のグループによる調査資料がある。ここでは、その資料採集の範囲が県内全域にわたっている藤本氏の報告と、先の LAJ 149・150図の全国分布を参考としながら、筆者の調査資料—若狭地方の肩車の俚言分布—を言語地理学的観点より考察する。そしてさらに、小浜市・遠敷郡内の分布を中心に、俚言分布の領域と学区との一致について言及する。

## 2. 調査および調査地点

筆者は、1976 (昭51) 年から1978 (昭53) 年にかけて、若狭地方の182地点(集落)で言語地理学的調査を実施した。若狭地方中央部の小浜市・遠敷郡の

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

調査（1976年調査）では、国土地理院発行の5万分の1地形図に載る集落のほとんどに、大飯郡・三方郡（1977・1978年調査）では、やや網の目を粗くして2～3集落に1つ位の割合で臨地調査している。調査における話者の条件、質問方法等は国立国語研究所の日本語地図方式に概ね拠っている。

若狭地方の調査結果に関しては、すでにいくつかの報告をしているが、調査地域の概略等については、拙稿（1978）（1980a）などを参照されたい。

以下に調査地点番号<sup>(1)</sup>と調査地点名、話者の生年・性別をまとめて記す。話者の生年は特記しないかぎり明治何年かを示している。図1「調査地点」図とあわせて参照されたい。

〔調査地点・話者一覧〕

〈地点番号〉	〈地点名〉	〈生年・性別〉
福井県三方郡美浜町		
5593・7849	ニユエ 丹生	(33・男)
・8952	タケナミ 竹波	(42・男)
6503・0981	スガハマ 菅浜	(34・男)
・2896	サカジリ 坂尻	(42・男)
・2935	サタ 佐田	(35・男)
・3613	ハヤセ 早瀬	(44・男)
・3763	マツハラ 松原	(36・男)
・3789	カワライチ 河原市	(42・男)
・5824	ノグチ 野口	(42・男)
・5922	オク 奥	(30・男)
・6941	タシロ 田代	(28・男)
・7962	アサガセ 浅ヶ瀬	(36・男)
三方郡三方町		

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

6503・1299	<small>ツネガミ</small> 常神	(41・男)
・2386	<small>ミコ</small> 神子	(大11・男)
・3379	<small>オガワ</small> 小川	(36・男)
・3493	<small>ユージ</small> 遊子	(29・男)
・4486	<small>ウミヤマ</small> 海山	(38・男)
・4640	<small>オ</small> 苧	(34・男)
・5478	<small>キタジロー</small> 北庄	(31・男)
・5634	<small>キヤマ</small> 気山	(40・男)
・6338	<small>シキミ</small> 食見	(39・男)
・6494	<small>コーチ</small> 河内	(35・男)
・6561	<small>ナルデ</small> 成出	(33・男)
・7544	<small>ムカサ</small> 向笠	(37・男)
・7645	<small>キタマユカワ</small> 北前川	(33・男)
・8585	<small>クロダ</small> 黒田	(39・男)
・8654	<small>アイダ</small> 相田	(38・男)
・9653	<small>ノトノ</small> 能登野	(29・男)
6513・0652	<small>クラミ</small> 倉見	(31・男)
<small>オニユウ カミナカチヨウ</small> 遠敷郡上中町		
6503・8440	<small>アマサカ</small> 海土坂	(31・男) (44・男)
・8478	<small>ミシヨノ</small> 三生野	(28・男)
・8492	<small>アソノ</small> 麻生野	(44・男)
・9497	<small>オートバ</small> 大鳥羽	(28・男)
・9560	<small>ミタ</small> 三田	(37・男)
6513・0473	<small>スギヤマ</small> 杉山	(34・男) (32・女)
・0478	<small>モチダ</small> 持田	(33・男)
・0522	<small>オハラ</small> 小原	(32・男)

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

・0572	ヤマウチ 山内	(40・男)
・1203	シモノギ 下野木	(40・男)
・1249	タマキ 玉置	(34・男)
・1299	ヒカサ 日笠	(32・男)
・1365	カネダ 兼田	(36・男)
・1462	ツツミ 堤	(42・男)
・1518	スエノ 末野	(35・男)
・1543	シタナカ 下タ中	(43・男)
・1562	アガリ 安賀里	(43・男)
・2324	コウダン 神谷	(42・男)
・2338	テントクジ 天徳寺	(40・男)
・2417	シモロンダ 下吉田	(35・男)
・2428	カミロンダ 上吉田	(43・男)
・2464	イチバ 市場	(36・男) (大3・女)
・2477	ミヤケ 三宅	(28・男)
・2511	ワキブクロ 脇袋	(43・男)
・2594	セキ 関	(28・男)
・3500	カリヤ 仮屋	(37・男)
・3620	シンドー 新道	(32・男)
・3662	クマガワ 熊川	(28・男) (41・男)
・4582	コーチ 河内	(41・男) (41・男)
オバマン 小浜市		
6502・7854	トマリ 泊	(36・男)
・7889	カツミ 堅海	(36・女)
・7988	ワカサ 若狭	(32・男)
・8973	ホトケダニ 仏谷	(31・男)

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

・ 9999	ホリヤシキ 堀屋敷	(33・男)
6503・7032	ウク 宇久	(28・男)
・ 7039	ニシオガワ 西小川	(30・男)
・ 7302	スノウラ 須ノ浦	(35・男)
・ 7332	タンギユ 谷及	(28・男)
・ 7395	タガラス 田烏	(31・男)
・ 8018	アノジリ 阿納尻	(34・男)
・ 8052	コガサキ 甲ヶ崎	(38・男)
・ 8098	ナゴ 奈胡	(大2・男)
・ 8115	アノ 阿納	(33・男)
・ 8254	ヤシロ 矢代	(41・女)
・ 8270	シツミ 志積	(27・男)
・ 9027	ハガ 羽賀	(大1・男) (27・男)
・ 9031	シモダハラ 下竹原	(40・男)
・ 9123	クマノ 熊野	(45・男) (45・女)
・ 9161	ツギヨシ 次吉	(大12・男)
・ 9262	オオタニ 大谷	(40・男)
6512・0697	オコツ 岡津	(37・男)
・ 0999	フシハラ *伏原	(35・男)
・ 1071	ノダイ 野代	(44・女)
・ 1657	シモカド 下加斗	(27・女)
・ 1662	コイカワ 鯉川	(40・男)
・ 1666	カミカド 上加斗	(40・男)
・ 1704	アラキ 荒木	(23・女)
・ 1753	クロコマ 黒駒	(30・男)
・ 1790	ノリカイ 法海	(38・男)

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

• 1823	<sup>ニシセイ</sup> 西勢	(38・男)
• 1836	<sup>ヒガシセイ</sup> 東勢	(34・女)
• 1963	<sup>ヤタベ</sup> 谷田部	(35・男)
• 1988	<sup>オザキ</sup> 尾崎	(37・男)
• 2889	<sup>クチダノ</sup> 口田縄	(大4・男)
• 2895	<sup>ナカイ</sup> 中井	(37・男)
• 2986	<sup>スノ</sup> 須縄	(35・男)
• 3590	<sup>オヤ</sup> 小屋	(37・男)
• 3709	<sup>ニシアオイ</sup> 西相生	(30・男) (29・男)
• 3799	<sup>タモダニ</sup> 田茂谷	(36・女)
• 3851	<sup>ヒガシアオイ</sup> 東相生	(33・男)
• 3962	<sup>オクダノ</sup> 奥田縄	(37・男)
• 4600	<sup>カミタ</sup> 上田	(29・男)
• 4637	<sup>シモタ</sup> 下田	(35・男)
• 4753	<sup>ワタダ</sup> 和多田	(28・男)
• 4766	<sup>フカノ</sup> 深野	(36・男)
• 4798	<sup>フカタニ</sup> 深谷	(34・男)
6513・0013	<sup>マルヤマ</sup> 丸山	(大7・男)
• 0045	<sup>フチノ</sup> 府中	(44・男)
• 0075	<sup>ワクリ</sup> *和久里	(36・女)
• 0082	<sup>ヌノオカ</sup> *湯岡	(42・男)
• 0107	<sup>タラノシヨ</sup> 太良庄	(27・女)
• 0113	<sup>クリタ</sup> 栗田	(40・男)
• 0143	<sup>タカツカ</sup> 高塚	(40・男)
• 0204	<sup>ホンボ</sup> 本保	(38・男)
• 0237	<sup>タケナガ</sup> 竹長	(35・男)

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

・ 0278	オ-ト 大戸	(40・男)
・ 0323	シンボ 新保	(41・男)
・ 0393	カモ 加茂	(32・男)
・ 1017	キザキ *木崎	(36・男)
・ 1033	イゴモリ 生守	(35・男)
・ 1037	タダ 多田	(38・男)
・ 1134	オニユ- 遠敷	(36・男)
・ 1148	ト-イチバ 東市場	(大4・男)
・ 1169	タイコ-ジ 太興寺	(33・男)
・ 1284	ヒラノ 平野	(33・男)
・ 2112	リユ-ゼン 龍前	(36・男)
・ 2118	ウエノ 上野	(31・女)
・ 2143	ジング-ジ 神宮寺	(40・男)
・ 2283	モンゼン 門前	(44・男)
・ 3184	タカノ 高野	(33・男)
・ 3239	イケノコーチ 池河内	(44・女)
・ 4103	カミタニ 神谷	(40・男)
・ 5125	ナカノハダ 中ノ畑	(22・男)
・ 5138	カミネゴリ 上根来	(41・男) (35・男)
ナ タ シ ョ-ム ラ 遠敷郡名田庄村		
6512・5313	オ-タカ 大滝	(40・女)
・ 5471	ジャト- 蛇頭	(30・女)
・ 5535	ニシタニ 西谷	(35・女)
・ 5660	シモ 下	(37・男)
・ 5673	ナカジヨ- 中條	(37・男)
・ 5752	ミエ 三重	(45・女)



福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

・ 6347	シロヤ 白屋	(21・男)
・ 6354	タナバン 棚橋	(38・女) (36・男)
・ 6423	モリマチ 森町	(34・男)
・ 6503	サノ 佐野	(34・男)
・ 6508	ナカ 中	(34・男)
・ 6609	オグラ 小倉	(39・女)
・ 6727	アゲノ 拳野	(35・男)
・ 6782	ドモト 堂本	(42・女)
・ 6814	ムシガノ 虫鹿野	(32・男)
・ 6902	キタニ 木谷	(39・男)
・ 7624	マキタニ 楨谷	(41・男)
・ 7958	ナガタニ 永谷	(大2・男)
・ 8776	シガタニ 染ヶ谷	(41・男)
オーイ オーイチロー 大飯郡大飯町		
6502・8586	カワムラ *河村	(42・男)
・ 8632	ハタムラ 畑村	(35・男)
6512・1429	ホンゴ *本郷	(40・男)
・ 1566	ナガイ 長井	(26・男)
・ 2291	フクタニ *福谷	(42・男)
・ 2353	オカヤス 岡安	(22・男)
・ 2404	オカダ 岡田	(30・男)
・ 2467	ノジリ 野尻	(43・男)
・ 2542	ヤマダ *山田	(30・男)
・ 3069	カワカミ 川上	(42・男)
・ 3175	ミツモリ 三森	(40・男)
・ 3235	イシヤマ 石山	(29・男)

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

・3401	<sup>チヂン</sup> *父子	(40・男)
大飯郡高浜町 <sup>タカハマチロー</sup>		
6501・8808	<sup>ミヤオ</sup> 宮尾	(43・男)
・8988	<sup>コーノウラ</sup> 神野浦	(37・男)
・9803	<sup>カマクラ</sup> 鎌倉	(31・男)
6502・7074	<sup>オトミ</sup> 音海	(38・男)
・9044	<sup>オグルイ</sup> 小黒飯	(36・男)
6511・1914	<sup>ヒルバタケ</sup> 蒜 島	(28・男)
6512・0187	<sup>タチイン</sup> 立石	(37・男)
・0352	<sup>ワダ</sup> 和田	(35・男)
・1005	<sup>ヒキ</sup> 日置	(34・男)
・1348	<sup>クラモチ</sup> 車持	(35・男)
・2106	<sup>コビ</sup> 子生	(35・男)
滋賀県高島郡今津町 <sup>タカシマ イマヅチロー</sup>		
6513・3648	<sup>アママスガワ</sup> 天増川	(33・男)
・4724	<sup>スギヤマ</sup> 杉山	(37・男)
・5738	<sup>ホーザカ</sup> 保坂	(34・男)
京都府北桑田郡美山町 <sup>キタクラダ ミヤマチロー</sup>		
6512・8273	<sup>ミタテ</sup> 見館	(40・男)
・9267	<sup>ワキ</sup> 脇	(29・男)
6522・0329	<sup>モリサト</sup> 盛郷	(30・男)

\* を付した地点は、調査協力者三好真理氏（当時福井大学学生）の調査地点である。



### 3. 肩車の俚言分布とその解釈

筆者が若狭地方およびその周辺地域の 182 地点で聞き得た肩車の俚言は、同じ類にまとめられるであろう音声変種をも全て加えると 79 種となり、驚いたことに約 2.3 地点に 1 つの割合で異なる俚言形に出会ったことになる<sup>(2)</sup>。

さて、これら 79 種の俚言形は、孤例的なものを除いて、同一の語形から派生したとみられるいくつかの類にまとめることができる。実際の分布状況は図 3、図 4 に示したが、図 3 では地図（凡例）が煩雑になるのを避けるため、まとめられるものはその類にまとめた上で凡例化してある。俚言の詳細な形については、図 4（孤例については図 3 も）と以下の記述によってみられたい。

では、図 3 によって分布を概観・考察する。なお、この地域ではあまり特殊な音声聞かれないこともあり、以下の記述では、便宜上俚言形を具体音声により近い片仮名で表記した。また、言及するに慎重であるべき語源の問題については、話者の内省報告（教示）が得られた場合を除いて軽々に触れることをせず、あくまでも言語地理学的立場からの考察を中心とする。

若狭地方の代表的俚言からみていくことにしたい。分布地点名もあわせて示した。

#### 3.1 シシノランギョク類<sup>(3)</sup>

シシノランギョク	下タ中, 安賀里
シシノランリョク	河内 (三方)
シシノランロク	成出
シシノダンロク	成出
シシノダンリョク	北庄
シシノダンジュク	海山
ランギョク	倉見
ダンギョク	佐田

### 福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

ダンゴク	気山
ダンジュクサン	北前川
シンモ	丹生
ダイダイ	菅浜
デンデンコ	松原

この類は、藤本良致（1975）によれば、福井県の肩車の俚言の中で最も分布が広いものとされ、嶺北地方<sup>(4)</sup>の勝山市にまでその分布域が及ぶという。LAJ 150図では、若狭地方に DANGYOKU、越前地方に DANGIKU の分布がそれぞれ1地点ずつ見え、福井県以外には分布が確認できない。

若狭地方では、東部の上中町から美浜町にかけての、いわゆる越前地方に隣接する地域に、かなりまとまって分布しており、この地域の分布傾向<sup>(5)</sup>からみて、通時的に古い層に属する俚言と考えてよさそうである。ただ、その分布状況から推して、隣接して分布するサルマカ類よりは新しい分布と解釈される。さらに、かつて若狭全域に広くシンノランギョク類が分布したか、東の敦賀市の影響を受けて若狭東部にのみ侵入伝播したものであるかについては、後者の可能性が高いと考える。

三方町成出（6503・6561）の話者は、「夏、伊勢の<sup>かくら</sup>神楽が来て肩車のような姿で獅子を舞ったから」、また、上中町下タ中（6513・1543）の話者は、「神楽の最後で子供を肩に乗せて舞うから」という内容のことを話しており、語源的には、藤本氏の言う「獅子の乱曲」説は一往納得できるものである。

ランギョクの「ラ」は調音点の一致から「ダ」に変化している<sup>(6)</sup>ものが目立つ。

### 3.2 オヤマノドーチュー類

オヤマノドーチュー	遊子、食見、三宅
-----------	----------

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

オヤマサンノドーチュー	小川
オヤマ	向笠

この類をシシノランギョク類に続けて示したのは、これらがシシノランギョク類に接して分布しており、シシノランギョク類と共通の命名動機により後に生じた俚言と解釈されるからである。即ち、この類もやはり伊勢の代神楽の訪れ（道中）によって生み出されたものと考えられるのである。

上中町三宅（6513・2477）の話者は、「伊勢から獅子頭をかぶって踊ってきたことから」との説明をしている。

ただ、シシノランギョク類が、越前地方の分布に連続する大規模な伝播を背景としているのに対し、オヤマノドーチュー類は、三方町西部あるいは上中町中北部で独自に発生、分布したものだろう。そして、上中町北部のカタクマ類、ミコン類の分布域にも、かつてはオヤマノドーチュー類が分布し、三方町西部の分布と連続していた時期があったと考えられる。

### 3.3 サルマカ類

サルマカ	野口、奥、新庄、浅ヶ瀬、相田、山田、野尻
サルマコ	黒田
サンマコ	能登野
サルマタ	新道、下、中、佐野、西谷、棚橋
サル	森町

この類は、藤本良致（1975）によると、嶺北地方の大野市の一部から福井市以南にかけても分布するらしく、LAJ 150 図でも若狭東部から敦賀市そして福井県北部に、その分布が確認できる。シシノランギョク類と同様、かつて福井県の広い範囲にわたって分布していたと考えられる。特に若狭地方では、東の

### 福井県若狭地方地における「肩車」の俚言分布

三方郡（上中町にも1地点）と西の大飯町、名田庄村に離れて分布しているところから、古くは若狭地方全域にサルマカ類が分布していたという、周囲論的解釈が成り立つ。

他の俚言との新古関係については、既述のとおり、三方郡の分布からシンノランギョク類よりも古い分布と解釈され、このことからサルマカ類は、図3で分布する俚言のうちで最も古いものと解釈できるのである。

サルマカ類のうち、一般に古形を残しやすい美浜町がサルマカで、かつ大飯町にもサルマカが分布していることから、サルマカが古く、サルマコ、サルマタ、サルはそれからの派生形（音声変種）であろう。

LAJ 150 図によれば、サルマカ類を含んで語頭にサルーを持つ肩車の俚言の分布は、全国の広い範囲に及ぶが、特に福井・石川・富山・新潟西部と東北地方の海岸部にかけての連続的な分布に関して、「この分布は、猿まわしそのものの伝播経路と関係があるかとも思われる。」という『日本言語地図解説<sup>(7)</sup>』は、その語源とも関わって興味深い指摘である。

### 3.4 サイヨレー類

サイヨレー	兼田
サンヨレー	玉置
サンヨリー	若狭
サンヨリ	泊
サンニョリ	堅海
サンニョ	須ノ浦
ハンニョ	下野木、谷及、田烏

### 3.5 チョーサイト類

チョーサイト	太興寺、遠敷、神宮寺
--------	------------

チョートマンダイ 上野, 門前

### 3.6 ミコシサン類

ミコシサン	海士坂, 脇袋, 加茂, 竹長, 本保, 大谷, 志積, 甲ヶ崎, 下竹原, 谷田部
ミコッサン	堀屋敷, 下竹原, 矢代
ミッコシサン	次吉, 熊野, 阿納
ミコシ	奈胡, 羽賀
ミッコシ	羽賀
ミッコ	麻生野

さて、上記の3つの類の俚言（サイヨレー類、チョーサイト類、ミコシサン類）については、まとめて述べることにする。

三方郡を中心に分布するシンノランギョク類、オヤマノドーチュー類、サルマカ類が、既に触れたように、伊勢の代神楽や猿まわしなどの大道芸に共通の命名基盤を持っていたとするならば、小浜市の中心部から東部にかけて分布するこれら3つの類の俚言もまた、ある共通の命名意識の下に生まれたものと考えられる。

サイヨレー類、チョーサイト類そしてミコシサン類に共通するもの、即ちそれは祭りの御輿<sup>みこし</sup>である。

サイヨレー、チョーサイトなどがそれぞれの分布域での御輿を担ぐ時の掛け声と一致することは、話者の報告—掛け声と一致すると報告された肩車の俚言は、サイヨレー、サンヨレー、サンヨリー、チョーサイト—からも明らかで、サイヨレー類とチョーサイト類にみえる他の音声変種は、掛け声に由来すると語源意識が薄れてから生じたものであろう。

図3、図4の分布からは、小浜市中心部にまとめて分布するミコシサン類



### 福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

が、サイヨレー類やチューサイト類よりも新しい俚言と解釈できる。この新旧交代劇には、語源の曖昧化したものを捨てて明確なものに変えようという、合理化の意識が関与していた筈である。

#### 3.7 チャンチャン類

チャンチャン	龍前，府中，多田，生守，伏原，尾崎，口田繩，東勢，西勢
チャンチャンコ	上根来
チャンチャンココ	上根来
チャンチャコ	湯岡
チャンコ	伏原
チンチン	丸山，荒木，黒駒，法海，上加斗，岡津，鯉川
チンチンボコ	三森，川上
チンチンバコ	福谷
チンバカ	父子
チンマカ	父子
チンチンボンボン	石山
チュンカモリ	小屋
チュンガリ	高野，神谷（小浜）

ミコシサン類の他に、小浜市中心部を伝播の源としてそこを含む新しい分布勢力と解釈されるものに、小浜中心部から南西部そして大飯町に分布するこの類がある。

若狭中西部に注目した場合、先のサルマカ類が分布していた所にタカンマ類が新しく分布を拡げ（現在は名田庄村と高浜町に分布）、その後さらにチャンチャン類が新しく分布し始めて、図3のような分布状況に至ったと考えられ

る。

柳田国男は「肩車考」の中で、「シャンコ」「チャンコ」の例をひき、飾り馬につけた鈴の響きを写したものと想像するが、この類が由来するところははっきりしない。

チャンチャコを答えた湯岡 (6513・0082) では、「肩の上に<sup>・</sup>チャンと乗せるから」、チョンカモリを答えた小屋 (6512・3590) では、「<sup>・</sup>チョンと乗せるから」、チンチンを答えた鯉川 (6512・1662) では、「孫の<sup>・</sup>チンチン (陰茎) が首に食らいつくと言われるから」との説明を話者から得たが、いずれも民間語源 (folk etymology) の域を出ないものだろうと思われる。

大飯町父子 (6512・3401) のチンマカは、分布からみて、チンチンとサルマカの混淆形であろう。

### 3.8 タカンマ類

- タカンマ 田茂谷, 深谷, 深野, 和多田, 上田, 永谷, 木谷, 三重, 拳野, 小倉, 堂本, 棚橋, 杉山, 畑村, 本郷, 子生, 日置, 蒜嶋, 小黒飯, 神野浦, 鎌倉, 宮尾, 杉山 (滋賀)
- タカタカ 東市場, 下田, 染ヶ谷, 白屋
- マタンマ 中條

分布から解釈して、この類がサルマカ類より新しく、チャンチャン類より古い俚言と考えられることは、前にも述べたとおりである。しかも、その分布は、滋賀県の杉山 (6513・4724) を除いて若狭西部のみにみられ、かつては、大飯町のチャンチャン類の分布域も含めて、もっと広く分布していたと推定される。

名田庄村中條 (6512・5673) のマタンマは、タカンマとサルマタのコンタミネーション (混淆) により生まれたものであろう。

## 福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

### 3.9 カタクマ類

カタクマ	三生野, 三田, 大鳥羽, 持田, 須繩, 盛郷, 脇
カタウマ	見館
カタンマ	坂尻, 小原, 神谷 (上中), 日笠, 杉山 (上中), 堤, 熊川, 野代, 拳野, 本郷, 和田, 車持, 立石
カタノセ	仮屋

カタクマは、LAJ 149 図によれば、近畿地方に広くまとまって分布し、この類が中央で発生した比較的新しい勢力であることを示している。柳田国男の「肩車考」では、「<sup>かたこま</sup>肩駒」からの変化であろうとされているが、LAJ 解説ではそれを疑問視している<sup>(8)</sup>。

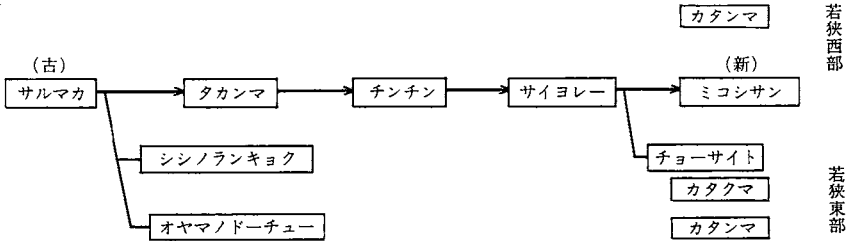
この類は若狭地方の西（大飯郡）と東（上中町）に分かれて分布し、一見タカノセ類と同様に、小浜を中心に勢力を伸ばしたものの名残のようにもみえるが、その分布域が各々の地域の中心部であることなどを考慮すると、むしろ、京都北部や滋賀県北西部の影響をそれぞれが個別に受けての、飛火的伝播によるものとの解釈が可能になる。LAJ 149 図では、カタンマの分布する大飯郡に続く京都北部舞鶴市付近にカタンマが分布し、カタクマの分布する上中町に続く滋賀県北西部にカタクマが分布している。もっとも、LAJ の分布からは、カタクマよりカタンマの方が古いと考えられるので、上中町でカタクマとともに分布のみえるカタンマは、カタクマが伝播する以前に上中町に広く分布していたものの名残なのかもしれない。

### 3.10 まとめ

ここまで、若狭地方における代表的な肩車の俚言 9 種（9 類）について、その分布を概観し、言語地理学的観点から新古関係や伝播経路等を考察してきた。これまで述べてきたことをまとめる意味で、若狭地方における肩車の俚言分布

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

図 2



の歴史を大まかに図示すると、図2のようになると思われる。

さて、これまで述べたもの以外の分布を図3で見ると、上中町の東南端2地点、新道 (6513・3620)、河内 (6513・4582)、および滋賀県の天増川 (6513・3648) に分布するネコ類 (ネココンボ、ネコヤイ、ネコノコ)、小浜の北の海岸部のオンマサン類、そして上中町中心部に分布するカタグルマが目立つ程度で、あとは孤例およびそれに近いものが点々と分布している。

神子 (6503・2386) のオッチャマサンについては、「子供の中でかわいい子をオッチャマサマと言う。そういう子が肩車をしてもらえるから」という話者の説明が聞かれた。

これら以外の俚言については説明を省略する。図3、図4を参照されたい。

#### 4. 肩車の俚言分布と学区との関係

多くの俚言が、それぞれ比較的限られた地域に分布している時、その分布の境界が学区と一致する場合のあることは、早く柴田武 (1963) によって、新潟県糸魚川地方におけるオタマジャクシの俚言分布の例が報告された。そしてさらに、馬瀬良雄 (1969) では、信飛国境地帯の調査資料に基づき、学区と方言





## 福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

(俚言) 分布の關係に焦點を当てての詳細な論述がなされた。またこの他にも、因美國境の事象を扱った鏡味明克(1975)もある。

ところが、俚言分布の境界と学区との一致を論じようとする際の問題点として、学区一小論で扱うのは話者の通学時の尋常小学校区域一が、村とか町とかいう行政上の何らかの単位とも一致する場合が多いということが挙げられる。すなわち、厳密に言えば、学区という要因が純粹な形で取り出される時に初めて、学区と俚言分布の關係を論じることができるのである。

以下では、厳密さにはやや欠けるものの、若狭地方中央部地域においてかなり顯著に見出される、肩車の俚言分布と学区との一致について考察を進める。

図4の中、線で囲んだのが学区の範囲で、それぞれの学区に付した数字は、以下の本文でそれぞれの学区に与えた数字に対応するものである。対照して見られたい。なお、分校がある場合は、線で囲んだ1つの学区の中をさらに線で囲んで示してある。

では、図4に示した学区のうち、まず、学区が旧行政区画と一致しているものから見ていく。旧行政区画との一致が見られる学区では、たとえ俚言分布の境界が学区と一致しても、それを純粹要因と即断できないからである。

旧行政区画と一致する学区を東から挙げる。

1. <sup>ウリヌー</sup>瓜生尋常高等小学校区(旧遠敷郡瓜生村)
2. <sup>ミナガワ</sup>宮川尋常高等小学校区(旧同郡宮川村)
3. <sup>マツナガ</sup>松永尋常高等小学校区(旧同郡松永村)
4. <sup>イマトミ</sup>今富尋常高等小学校区(旧同郡今富村)
5. <sup>クチナダ</sup>口名田尋常高等小学校区(旧同郡口名田村)
6. <sup>ナカナダ</sup>中名田尋常高等小学校区(旧同郡中名田村)

これらのうち、瓜生、口名田の2学区を除く4学区では、俚言分布の境界と学区とがほぼ一致している。

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

分校区があるにもかかわらず、松永、中名田両学区を大学区として、旧行政区画と一致するものに含めたのは、その分校区が話者の通学時以前に存在したものである。ただし、両学区における俚言分布と学区（分校区）との一致には注目する必要がある。因に、松永学区では、明治36年まで池河内（6513・3239）に分校が置かれ、中名田学区では、明治28年まで小屋（6512・3590）に独立した学校が、そしてその後も毎年冬季分校がそこに置かれていたことがわかっている。

次に、学区と旧行政区画が一致しないものを見たい。

旧行政区画と一致しない学区を、やはり東から列挙していく。

7. 鳥羽<sup>トバ</sup>尋常高等小学校区
8. 三宅<sup>ミヤケ</sup>尋常高等小学校区
9. 野木<sup>ノギ</sup>尋常高等小学校区
10. 熊川<sup>クマガワ</sup>尋常高等小学校区
11. 田烏<sup>タガラス</sup>尋常高等小学校区
12. 矢代<sup>ヤシロ</sup>尋常小学校区
13. 阿納尻<sup>アノジリ</sup>尋常小学校区
14. 堅海<sup>カツミ</sup>尋常小学校区
15. 西津<sup>ニシヅ</sup>尋常小学校区
16. 雲浜<sup>ウンビン</sup>尋常高等小学校区
17. 奈胡<sup>ナゴ</sup>尋常高等小学校区
18. 太良庄<sup>トラシロー</sup>尋常小学校区
19. 遠敷<sup>オニユ</sup>尋常高等小学校区
20. 下根来<sup>シモネゴリ</sup>尋常小学校区
21. 上根来<sup>カミネゴリ</sup>尋常小学校区
22. 加斗<sup>カド</sup>尋常高等小学校区
23. 出合<sup>デアイ</sup>尋常小学校区



## 福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

24. 知<sup>チ</sup>三<sup>ミ</sup>尋常高等小学校区
25. 奥<sup>オク</sup>名<sup>ナ</sup>田<sup>タ</sup>尋常小学校区
26. 坂<sup>サカ</sup>本<sup>ホト</sup>尋常高等小学校区
27. 納<sup>ノ</sup>田<sup>タ</sup>終<sup>オイ</sup>尋常小学校区

以上の21学区である。

これらのうち、肩車の俚言分布と学区がほぼ見事に一致するものが、鳥羽、三宅、野木、田鳥、矢代、阿納尻、堅海、西津、雲浜、奈胡、下根来、加斗、出合、知三、奥名田の15学区にも及ぶ。さらにその中で、分校区が俚言の独立した分布域を形成しているものに、鳥羽学区の麻生野分校区（6503・8440, 6503・8492）、三宅学区の神谷分校区（6513・1299, 6513・2324）、野木学区の堤分校区（6513・0473, 6513・1462）、そして加斗学区の東部2地点（6512・1823, 6512・1836）がある。

これらの旧行政区画と一致しない学区（特に分校区）における、学区と俚言分布の境界との一致は、その分布が生じる背景に学区の影響のあった可能性を高くし、さらに、以下の諸事実は、若狭地方中央部地域において、図4の如き肩車の俚言分布を生じせしめた重要要因としての、学区の存在を考えさせずにはおかない。

- (1) 滋賀県の天増川（6513・3648）に熊川学区と同じネコ類（ネコノコ）が分布する。天増川では、話者の通学時代、尋常小学校は南の保坂（6513・5738）に通ったが、そこに高等科がなかったため、滋賀県の依託を受けた上中町熊川（6513・3662）の高等科に通ったとのことである。高等科の学区の影響が考えられる。
- (2) 阿納尻学区で一番西の集落である若狭（6502・7988）には、他の4地点（オンマサンが分布）と異なるサンヨリーが分布する。そして、そのサンヨリーは、西に隣接する堅海学区の分布と一致するものである。ところが

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

『内外海誌』によって、わずか1年間であるが、若狭の児童が阿納尻校への通学を止め堅海校に編入している事実が確かめられた。時期は明治41年4月から42年4月にかけてとあり、このことから、若狭の話者も、9歳から10歳にかけての1年、堅海校に通っていることになる。1年間ではあるが、この学区の変更が、先のような分布を生んだ原因とも考えられる。

- (3) 行政区画上は内外海地区(旧内外海村)に入る甲ヶ崎(6503・8052)は、本来ならば阿納尻学区であるべきところが西津学区であった。甲ヶ崎に分布する肩車の俚言は西津学区と同じミコシサンで、阿納尻学区のオンマサンとは一致しない。
- (4) 丸山(6513・0013)も、本来奈胡学区に入るべきところが雲浜学区に含まれていた。丸山には奈胡学区のミコシサン類と異なりチンチンが分布している。

さて、これまでは、話者の通学時の学区を中心に俚言分布の境界との一致を見てきたが、ここで、話者の親の時代の学区を反映していると思われる分布について簡単に触れておきたい。

従来、学区との関係を扱った論考では、話者の親の時代の学区との関係については、あまり触れられていなかったように思う<sup>(9)</sup>。しかし、話者の通学時の学区との間に変更がある場合には、考慮してみる必要がある。

例えば、初めの方で触れた、松永学区や中名田学区での旧分校区と俚言分布の一致がそうであるし、また、瓜生学区、口名田学区内の分布もその可能性がある。『遠敷郡誌』によれば、瓜生尋常高等小学校は、明治7年創立の昭明尋常小学校と同16年創立の安賀里尋常小学校が、明治37年併合されてきたとある。下タ中(6513・1543)、安賀里(6513・1562)のシンノランギョクは併合以前の親の学区を反映した分布かもしれない。同様の事情は口名田学区にもみられる。同書によれば、口名田尋常高等小学校は、明治6年創立の至簡、良

## 福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

能, 相生, 有朋の4つの尋常小学校を明治36年に併合してできたとあり, 図4で口名田学区に分布する6種の俚言は, そうした過去の歴史(親の学区)を反映したものとも考えられるのである。

## 5. おわりに

以上, 筆者自身の調査資料を中心に, 福井県若狭地方における肩車の俚言分布を, 分布解釈と, 分布と学区との関係という, 2つの観点から考察してきた。

図3, 図4で分布のみえる俚言のうちには, 小論で十分に触れられなかったものも未だ多く, 特に, 孤例的なものには殆ど言及できなかった。それらについては, また別の機会に譲ることとする。

最後に, 調査に御協力下さった地元の教育委員会, 公民館, そして多くの話者の方々に御礼申し上げる。

## 注記

- (1) LAJ作成に際して用いられた, いわゆる国立国語研究所方式による地点番号。国土地理院発行の5万分の1地形図をもとに, 調査地点の番号を全国一貫した方針で付けるシステム—方言調査基礎図システム—である。詳しくは, 『昭和32年度国立国語研究所年報』(1958 秀英出版) 56—61頁, およびLAJ第1集(付録A)『日本言語地図解説—方法—』(1966 大蔵省印刷局) 33, 34頁参照。
- (2) LAJ 149図と150図の比較から, 興味深い事実が観察される。LAJでは149図に肩車の一般的な名称, 150図に特殊な名称の分布が載るが, 149図を見ると, 小論で取り上げた若狭地方から日本海側沿いの福井, 石川, 富山に空白の部分が多いことに気付く。つまり, この地域には150図に示されるような特殊な名称の分布が目立つのである。2.3地点に1つの割合で別の肩車の俚言に出会うといった事実が, こうした地域的特徴を反映しているものだとしたら注目すべきことである。

因に, 昨年(1981年)から調査の機会を与えられている, 石川県能美郡辰口町とその周辺の言語地理学的調査においては, 55の調査地点に対し30種の肩車の俚言が聞かれた。こちらは1.8地点に1つの割合である。

- (3) 「ギ」は, その子音が鼻濁音[ŋ]であることを表わしている。ガ, グ, ゲ,

## 福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

ゴの場合も同様である。子音が破裂音 [g] の場合は、ガ、ギ、グ、ゲ、ゴと表記する。

- (4) 福井県は、旧国名では敦賀市までを越前国に含むが、気候その他自然的環境においては、南条郡と敦賀市の間にある木ノ芽峠を境にして異なりをみせることが多く、方言区画の上からも、南条郡と敦賀市の境に北陸方言と近畿方言の境界線が引かれるとされている。福井県内では、この木ノ芽峠から北を嶺北地方、南を嶺南地方と呼んで区別することが多い。
- (5) 拙稿 (1980 a) を参照されたい。
- (6) [d] と [ɾ] は、ともに歯茎音で調音点が一致するため交替が起り易い。特に若狭地方では、この他にも [d] と [ɾ] の交替現象がしばしば観察される。
- (7) LAJ 第3集 (別冊) 『日本言語地図解説—各図の説明3—』(1968 大蔵省印刷局) 110頁参照。
- (8) LAJ 第3集 (別冊) 『日本言語地図解説—各図の説明3—』106頁参照。
- (9) 馬瀬良雄 (1969) 18頁にはこの問題に関連した記述がある。

### 参考文献

- 遠敷郡教育会 (1922) 『遠敷郡誌』 遠敷郡教育会
- 鏡味明克 (1975) 「因国境の学区と方言の研究」(『岡山大教育学部研究集録』41)
- 加藤和夫 (1978) 「京都周辺地域にみる語の分布パターン—福井県若狭地方の調査から—」(『日本方言研究会第26回発表原稿集』)
- (1980 a) 「福井県若狭地方における言語分布相—主に語の伝播の観点から—」(『都大論究』第17号 東京都立大学国語国文学会)
- (1980 b) 「詞章を対象とした言語地理学—若狭地方の「螢とり歌」の場合—」(『佐藤茂教授論集国語学』 桜楓社)
- (1981) 「田炉裏の座名体系の分布と変遷—若狭地方の田炉裏をめぐる語彙—」(『都大論究』第18号)
- (1982 a) 「圏分布と方言圏論—分布に探る「つらら」方言の音韻変化過程—」(『(福井大学) 国語国文学』第23号 福井大学国語国文学会)
- (1982 b) 「若狭地方における家族呼称の分布とその変遷」(『日本語研究』第5号 東京都立大学日本語研究会)
- 国立国語研究所 (1966—74) 『日本言語地図』第1—6集 大蔵省印刷局
- 柴田 武 (1963) 「オタマジャクシの言語地理学」(『国語学』第52集)
- (1969) 『言語地理学の方法』 筑摩書房
- 藤本良致 (1975) 「福井県のかたぐるま (肩車) 方言」(『日本方言研究会第21回発表原稿集』)

福井県若狭地方における「肩車」の俚言分布

馬瀬良雄（1969）「学区と方言」（『国語学』第77集）

柳田国男（1962）「肩車考」（『定本柳田國男集 第20巻』所収 400—415頁 筑摩書房）

〔付記〕 小論中「4. 肩車の俚言分布と学区との関係」の部分は、1977（昭52）年8月14日、福井国語学グループ第85回研究発表会における口頭発表原稿の一部に基づいて書き改めたものである。

（1982.10.28 稿了）